CODEN:AEKNEL

秋田県衛生科学研究所報

第 47 輯

平成14年度

ANNUAL REPORT

OF

THE AKITA PREFECTURAL INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH

No. 47

2003

秋田県衛生科学研究所

はじめに

2004年最初のニュースが、SARS患者の発生であった。昨年夏に終息宣言して以来始めての実験室外での患者が中国で発見された。このことによってSARSコロナウイルスはこれからも流行を繰り返すであろうことが明らかになった。しかも、昨年大流行したウイルスとは遺伝子がかなり異なっていたということも注目された。そして、1月中旬になって、トリ型インフルエンザが山口県の養鶏場で発生した。これはＨ５Ｎ１で、かって香港で死者も何人も出し、ニワトリが何百万羽も殺処分され落ち着いたかに見えたが、今、東南アジアでもアメリカでもその他の国でも大流行しているとのことである。感染経路は未だ不明で、渡り鳥も考えられるが、人と一緒に移動してきた可能性もあるという。少し前にはBSEが問題となり、アメリカからの牛肉が輸入禁止になっていて、牛肉と鶏肉の需供バランスが崩れ、日本人の台所にも変化が起こるであろう。これらの新興感染症はここ30年で40種類ほど出現していて、大きな問題となったものとしては、上記以外ではエボラ出血熱、レジオネラ、成人Ｔ細胞白血病、エイズ、O-157，各種肝炎ウイルス、などが挙げられる。

一方では再興感染症としてマラリア、ペスト、ジフテリア、百日咳、結核、コレラ、デング出血熱、黄熱病、各種寄生虫病などが流行して来てもいる。

そして一般的に、先進国では常在菌による院内感染の危険が増していて、困ったことにはそれらの菌が多くの抗生物質に耐性を持ってしまっていることである。まさに、これは世界的な問題であって、ようやく軌道に乗り始めたエイズのＨＡＲＲＴ療法でさえ、耐性ウイルスが発現しているとのことである。アフリカではどんな薬も効かないスーパー耐性結核菌が発現したとの報告もあった。

日本ではエイズがじわじわと感染者を増やしているが、その素地としての性感染症が、若者の放恣な性的接触で爆発的に増加しているとの報告がある。性感染症の保菌者はエイズに感染しやすい状況にあり、いつエイズの爆発的感染が起こるか懸念される。

これらの事態にあっても、マスコミが騒がないこともあり、日本の教育界はエイズ・性感染症を積極的に防ぐ教育をしようとはしない。これは全くの責任逃れであり、死なないまでも著しくＱＯＬを悪くすることで、健康であるべき青少年の生への冒涜ではないかと考える。

紙面の都合で生活習慣病の記述は避けるが、がんについては特に大きな視点の変化が生じてきて、がんは治るものであるという事実が理論で裏付けされてきたことを特記したい。

環境問題を考えれば、まずロシアではチェルノブイリ事故に代表される放射能汚染が国中をむしばんでいるとのことである。すべてに国家統制の厳しかったことにより、国民にはまったく軍

事機密や都合の悪い健康情報などは知らされず、また軍隊も役所も無責任体制のきわまった状態にあったため、原子力潜水艦が40数隻もあちこちに放棄され、朽ち果てるままになって放射能が漏れていることや、発電所の核廃棄物がきちんと処理されず、いい加減に捨てられていたため一般の建築物に紛れ込み、中の住人に障害を与えていたこと等が判明してきた。国が崩壊すると言うことがどのようなものかを如実にあらわすものは、管理されてたはずの放射性物質がヤミで売買されたことであろう。鉛の容器にもいれずに持ち運んでいた売人が放射線障害にかかったことがあったとも聞く。隣国中国では、かっての高度成長時代の日本のように、石炭・重油をたいて工場の機械を稼働させるのに、排気の除染などはせずに各地で大変な大気汚染を引き起こしていること、など、世界中で環境汚染は目に余るものがあり、当然のことながらそこの国民は大きく健康が損なわれている。また化学物質がテロに使われる脅威はますます増加していて、これは松本サリン事件が世界で最初の例であり、最近では中国での殺鼠剤入り事件など、一度に多くの人に被害を与えることが出来る点で大問題である。化学物質はたちまちに症状がでて、対処がすぐ必要であるが原因物質がわからない限り難しいことや、救助に行った人間もやられてしまうという危険性があること、そして、ガスであればすぐ拡散してしまうこと、水などと反応して成分がまったく変化してしまい、原因物質の特定が難しいことなどがある。そして使用禁止の農薬など身近な化学物質が使われた農作物や、害があるとされる物質が混入した食物、そして有害物質が混入した水道水などが我々の身近に存在し、我々の健康がじわじわとむしばまれていく現代である。

まさしく目に見えない危険が、あるものは空を飛んで遙か彼方から、あるいは食物を介して身体の内側から、あるものはあっというまに、あるものはじわじわと我々の身体をむしばむ時代となってきた。国レベルでは国立感染症研究所や災害救急センターなど各種の研究所がその先兵となって日夜努力をしているが、地方ではわれわれ、衛生研究所がその任に当たらなければいけない。この文を書いている今、トリインフルエンザが全国の養鶏場へ波及しかけている。しかもこれはＨ５Ｎ１と判明した。この遺伝子変異をいとも簡単に生じるウイルスが、何ヶ月も鶏に蔓延すると次は人間の番であろう。われわれ衛生研究所の使命として、このような世界そして日本全体の衛生状態をしっかりと見据え、国民の健康を真剣に地方で守る砦とならなければならないと考えている。そしてそういう地道な仕事が国民全体の健康を守ることにつながることになると信じている。

平成16年 2 月

秋田県衛生科学研究所長
鈴 木 紀 行